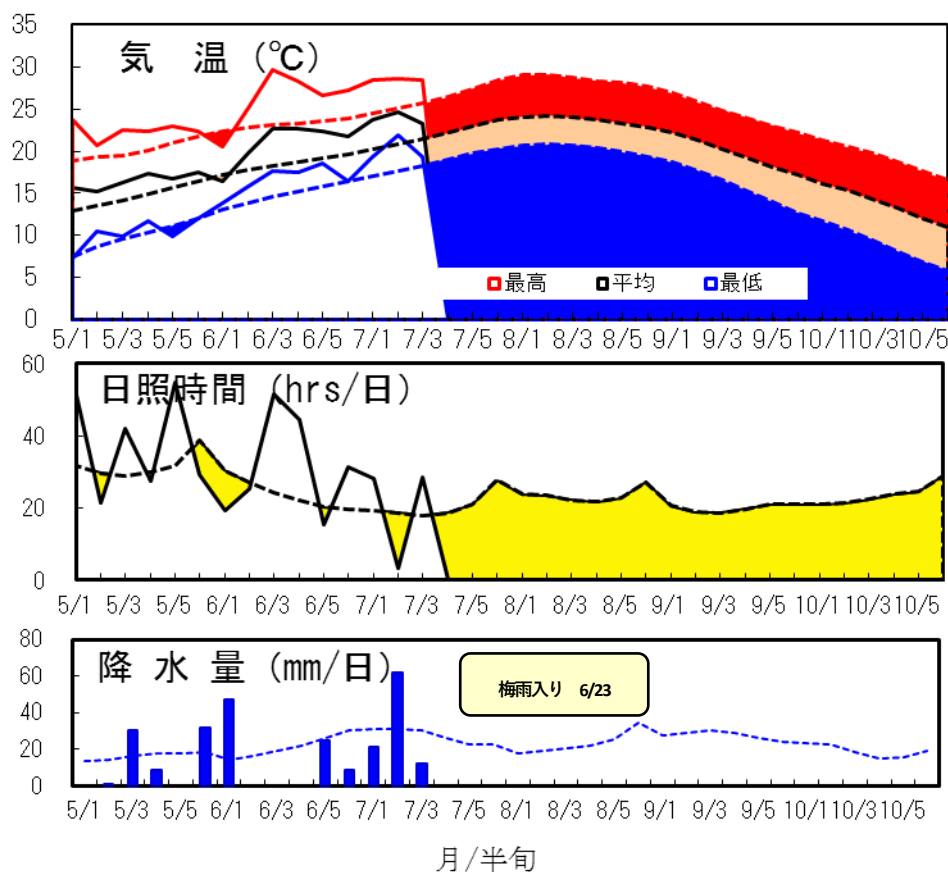


～出芽は良好 7月上旬の生育は概ね平年並み～

～降雨の影響で停滞水が多い傾向 中耕培土の適切な実施を～

1 気象経過



◆7月11日発表 東北地方の1か月予報(7月13日～8月12日までの天候見通し)【気象庁ホームページより】

- ・期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多い。期間の後半は、天気は数日の周期で変わる。期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性がある。
- ・向こう1か月の気温は、高い確率80%、平年並み若しくは低い確率10%。
- ・降水量は、多い若しくは少ない確率30%、平年並みの確率40%。
- ・日照時間は、多い若しくは少ない確率30%、平年並みの確率40%。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北地方	向こう1か月 07/13～08/12	10 10 80
		1週目 07/13～07/19	10 10 80
		2週目 07/20～07/26	10 20 70
		3～4週目 07/27～08/09	20 30 50
降水量	東北地方	向こう1か月 07/13～08/12	30 40 30
日照時間	東北地方	向こう1か月 07/13～08/12	30 40 30

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

2 生育状況

① 5月24日播種

- ・出芽日数は平年並みの7日であった。播種数日後に降雨があったことから、播種から出芽まで適度な土壌水分となり、出芽揃いは良好であった。

② 6月14日播種

- ・出芽日数は平年並みの7日であった。播種後降雨が無い日が続いたが、出芽揃いは概ね良好であった。

出芽状況

品種名	播種期 (月/日)	出芽期 (月/日)	出芽日数			
			本	年	前年差	平年差
タンレイ	5/24	5/31	7日	同日		0日
ミヤギシロメ	5/24	5/31	7日	同日		0日
ミヤギシロメ	6/14	6/21	7日	同日		—

注1) 出芽日数は播種翌日から出芽期までの期間

注2) 平年差は過去5か年（R1～R5）の平均値との差

注3) 6/14播種のミヤギシロメはR4からのデータなので平年値は無い

- ・「タンレイ」、「ミヤギシロメ」とともに主茎長、主茎節数は平年よりやや少なく、分枝数は平年より多かった。
- ・総節数は「タンレイ」が平年よりやや多く、「ミヤギシロメ」は平年より多かった。
- ・7月上旬の生育は、概ね平年並みと思われる。

生育調査結果（7月3日調査）

播種期	品種名	主茎長(cm)			主茎節数（節/本）			分枝数（本/本）			総節数（節/本）		
		本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差
5/25	タンレイ	25	-17	-3	7.7	-1.9	-0.6	1.3	-0.6	0.6	11.8	-2.7	1.0
播種	ミヤギシロメ	27	-16	-3	7.6	-1.7	-0.5	2.0	-0.1	1.3	12.6	-2.3	2.2

注1) 平年差は過去5か年（R1～R5）の平均値との差

注2) 栽植密度は、条間75cm×株間20cmとした（1株2粒播種）

【宮城県古川農業試験場 令和6年度 大豆作況試験 調査結果より】

3 今後の管理

1 湿害対策

- ・排水対策の重要な時期は、①播種直後の発芽期、②根粒着生から開花前までの生育前期、③子実が肥大する生育後期である。
- ・生育後期は湿害により未熟粒や障害粒が発生するので、登熟を良好にするためにも排水対策が重要となる。
- ・本年は梅雨入り以降、まとまった降雨があり、ほ場内に滞水しているところが多く見られる。過湿によって土壌が酸素不足になり、根粒菌の活性が低下することがあるので、停滞水は早めに排水する。

2 中耕培土

- ・中耕培土の実施によって、培土部分に大豆の不定根が発生し、養水分吸収力のアップ、不定根に着生する根粒菌による窒素固定、倒伏防止、通気性の改善、除草効果等、多くの効果が期待できる。
- ・播種後に散布する除草剤（土壌処理剤）の有効期間は、下図のとおり播種後 25 日程度と言われている。また、5月下旬に播種をすると、早生品種のタンレイ等は7月下旬には開花が始まることから、開花 10 日前までに中耕培土を終えることを基本とする。播種の時期によって、中耕培土の作業期間は限られてくるので、下図を参考にして中耕培土の作業計画を立てる。

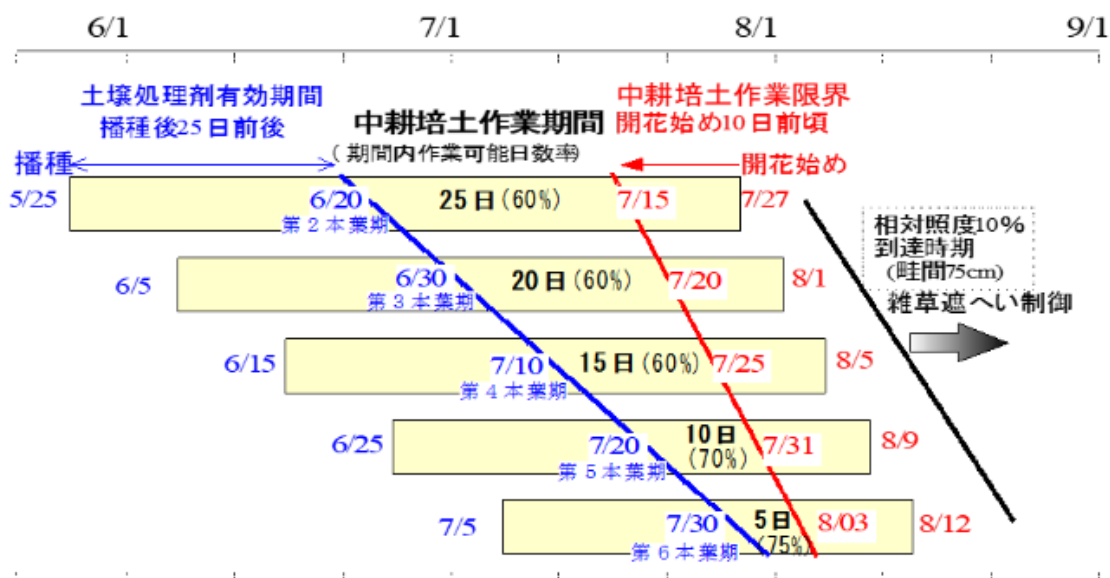
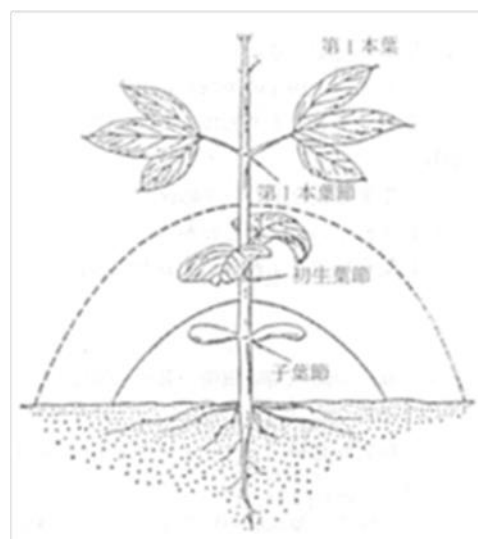


図 中耕培土作業可能期間設定のめやす

◆培土の目安は、右図を参考にする。

- ・普通播栽培（5月下旬～6月上旬播種）では、1回目は本葉2～3葉期に子葉節がかくれる高さまで、2回目は6～7葉期に初生葉がかくれる高さまで行う。
- ・晩播栽培（6月中旬～7月播種）では、大豆の繁茂量が少ないので、排水と雑草防除を主体に1回程度とし、本葉5～6葉期に子葉節がかくれる程度の高さまで行う。
- ・株元までしっかり土寄せすることで、土中の茎下部から不定根が発生する。
- ・雨が多く、1度も中耕・培土が実施できなかった場合は、開花が近づいでも培土を実施することで、大豆の生育量を確保することができる。



【培土の目安】

3 雑草防除

- ・「広葉雑草対象」の除草剤として、「大豆バサグラン液剤（ベンタゾン塩液剤）」と「アタックショット乳剤（フルチアセットメチル乳剤）」が普及に移されている。この2剤は、気象条件によって除草効果に変動がみられるので、注意が必要である。

① 大豆バサグラン液剤

- ・散布後24時間以内の日照時間が少ないと、効果が低下する場合がある。すなわち、曇天や降雨日を避け、散布後も日照に恵まれると予想される天候時に散布すると、効果が高まる。

② アタックショット乳剤

- ・散布前後48時間の平均気温が25℃以上だと、効果がやや低下する場合がある。

◆大豆バサグラン液剤は「オオイヌタデ」や「アメリカセンダングサ」に効果が高く、アタックショット乳剤は「シロザ」、「ホソアオゲイトウ」や「イヌホオズキ」に効果が高い。なお、雑草の大きさからみた散布適期については、下図を参照のこと。

◆本年は梅雨入り以降、まとまった降雨があり、イネ科雑草の目立つほ場も見られる。イネ科雑草対象の茎葉処理剤の散布も考慮されたい。

主要雑草における大豆バサグラン液剤とアタックショット乳剤の比較

オオ イヌタデ	F 2葉・3cmまで B 15cmまで	アレチウリ	F 5葉・つる化前まで B 5葉・つる化前まで
アメリカ センダングサ	F ー B 20cmまで	マメ アサガオ	F 4葉・つる化始まで B 3葉・つる化前まで
シロザ	F 4葉・5cmまで B 2葉・3cmまで	アメリカ アサガオ	F 2葉まで B 2葉まで
ホソアオ ゲイトウ	F 6葉・10cmまで B 3葉・3cmまで	イチビ	F 6葉・15cmまで B 6葉・15cmまで
イヌ ホオズキ	F 10cmまで B 6葉・5cmまで	オオ オナモミ	F 4葉・10cmまで B 6葉・15cmまで
(凡例・散布薬量) F アタックショット乳剤 50mL/10a B 大豆バサグラン液剤 150mL/10a		オオブタクサ クサネム ツユクサ	F・Bともに 効果が小さい～ない

- ・アタックショット乳剤は、大豆に褐変等の症状を発生させることが、メーカーから公表されている。特に、処理前後48時間の平均気温が23℃以下だと、下図のように強い薬害症状がみられる場合がある。

処理前後48時間の平均気温：20.1℃



処理前後48時間の平均気温：26.4℃



図1 フルチアセットメチル乳剤による薬害症状（処理後3～4日）

注）品種はタンレイで、大豆2葉期に処理した

- ・また、アタックショット乳剤の薬害症状には、品種間差がみられる。現在、宮城県の優良品種において、下表のとおり品種間差が確認されている。

薬害リスク	品種	備考
小	ミヤギシロメ, タンレイ, きぬさやか	減収につながる生育抑制を生じた事例がない
小～中	あやこがね	タンレイと比較して、初期の生育抑制が強い場合があるが、開花期の20日後までに回復することが多い
中	タチナガハ, すずほのか	タンレイと比較して、初期の生育抑制が強く、その後の回復が不十分となる場合がある